

家族のペット飼育態度が子どもの飼育態度や 共感性・向社会的行動に与える影響

森下正康
(児童学科教授)

小林美月
(児童学科09期生)

本研究は、家族のペット飼育態度が子どものペット飼育態度と、子どもの共感性や向社会的行動にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。従来の研究結果を確認すると共に、新しい視点から次の仮説を検証した。仮説：家族のペットに対する態度（世話や愛情）が豊かなほど、子どものペットに対する態度が豊かとなり、子どもの共感性や向社会的行動得点が高くなる。小学5・6年生を対象に質問紙調査を行い、家族と子どものペットの世話や飼育態度、子どもの共感性、向社会的行動について測定した。記入漏れ等のない225（男子91、女子134）名のデータを分析の対象とした。因子分析に基づいて尺度を構成し、 α 係数を算出して尺度の信頼性を確認した。分散分析の結果、①男子について、家庭でのペット飼育経験群の方が飼育経験無群より「共感性」や「向社会的行動」得点が高かったが、女子には有意差はなかった。また、②犬の飼育経験群は金魚の飼育経験群よりペットへの「世話」と「愛情」の程度、「共感性」得点が高いことが明らかとなった。仮説に関して、パス解析の結果、犬と金魚に共通する結果として、家族のペットに対する態度の特徴が、子どものペットに対する態度の特徴に影響を与えること、家族のペットに対する「世話」は子どものペットに対する「世話」を介して、子どもの「共感性」を高め、その「共感性」は子どもの「向社会的行動」を高めるということが示された。したがって、基本的には仮説は支持された。単に家庭でペットを飼育しているというだけではなく、子どもがペットを世話する家族の姿を観察し、それをモデルとして子ども自身がペットの世話をすることが、共感性や向社会的行動を高めるということが示唆された。

キーワード：ペット、共感性、向社会的行動、児童、親子関係、モデリング

問題

子どもと動物とのかかわりにはさまざまな効果が期待されている。幼稚園や小学校教育において、動植物とのかかわりのなかで、優しい豊かな心情が育ち、生命を大切に作る気持ちなどが養われると考えられている（文部科学省、2008, a, b）。吉村ほか（1983）の調査によると、幼稚園および保育園において、動物の飼育や植物の栽培を通して指導者が幼児に期待するものとして、思いやり、愛、いたわりの心など情操面の陶冶であることが示された。今野・尾形（2010）の札幌市内の全小学校を対象とした調

査では、9割以上の小学校が動物飼育の必要性を感じており、8割以上の小学校で動物を飼育していることが明らかとなった。動物飼育の目的として「生命の大切さに気づかせる」が約9割、「思いやりの気持ちを育てる」「動物をかわいがり育てる」が約6割、「責任感を育てる」「豊かな感受性を育てる」「ふれあいを体験させる」が約5割の小学校で見られ、動物飼育への期待が大きい。

一般に思いやりという言葉には二つの意味があって、一つは優しい心や気持ちを指し、もう一つは人の助けになるような行動を指している

(森下, 2010)。前者は共感性とよばれ、能動的また想像的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験することを意味する(角田, 1991)。他方、後者は向社会的行動とよばれ、見返りを期待しない人のためになる行動であり、分与行動、奉仕活動、寄付行動、支援・援助行動など自発性に基づいた行動を指す(菊池, 1988)。

塗師(1999)の大学生を対象にした研究では、女子は飼育経験がありかつ動物好きである群の方が、それ以外の群よりも共感性が高いという結果であった。また、小学生、中学生、高校生を対象とした研究(塗師, 2000)では、家庭において現在飼育経験がある小学生女子、小学生男子、高校生男子において、いずれも共感性が高かった。このように、ペットの飼育経験やペットに対する気持ちが共感性と関連するという研究はこれまでもみられるが、向社会的行動にまで言及した研究はあまりない。共感性が高ければ他者の視点に立って行動することが多くなると予想される。戸田(2003)の保育園の年長児と年中児を対象にした研究において、共感性の感情認知の側面と向社会的行動と有意な関連が認められ、特に年長児においては感情認知得点が高い者ほど向社会的行動得点も高いという結果であった。また、首藤(1985)が小学5年生の情緒的共感得点と分与行動との関連を調べた結果、共感群は非共感群より分与率が有意に高かった。ここでは、共感性が児童の分与行動を促進するということが示唆されている。

動物の飼育には家庭におけるペットの飼育と学校での動物飼育などが考えられる。大西・米澤(2009)の大学生を対象とした研究では、自宅で動物を飼ったことがない人は、動物を下等生物・物体視しやすいことが示された。学校での飼育経験のある人の動物観においては、飼育必要性以外には影響がなく、係の仕事や授業の一環としての作業になってしまっていると指摘している。このように、学校での動物とのかかわりよりも、家庭でのペット飼育経験の方が動物観に影響をもたらす、ペットが人間に与える影響は大きいのではないかと考える。以上から

次のような仮説が考えられる。仮説①：家庭において、ペット飼育経験のある子どもは、ペット飼育経験のない子どもより共感性や向社会的行動得点が高い。

塗師(2000)の研究では、飼育経験の有無だけでなく、家庭でペットを飼育する際にそのペットをかわいがって飼育したかどうかということが、共感性の発達にプラスの影響を及ぼすことが示された。また、糊沢・福本・岩立(2009)の大学生を対象とした研究では、飼育経験のある男子において「ペットへの養護体験」の高い群は低い群よりも養護性が有意に高いという結果であった。つまり、単にペットを飼育するだけではなく、ペットに対してどのような態度でどの程度関わっているかということが、共感性や向社会的行動に影響をおよぼすと考える。

小学5・6年生を対象とした塗師(2002)の研究において、男子では犬とハムスターの飼育経験のある群の方がペット飼育経験のない群よりも共感性が高かった。しかし、猫については男女ともそのような関連はみられなかった。このように、ペットの種別によって飼育経験と共感性との関係は異なるようである。太田・西本・井上(2005)の調査では、現在飼っているペットの種類で最も多かったのは犬であり、2番目は猫、次いで金魚であった。過去に飼ったことがあるペットの種類では金魚が最も多く、次いで犬が多いという結果であった。例えば、犬と金魚では世話やかかわり方に違いがみられ、そのためにペットの種類によって共感性や向社会的行動にも差異がみられるのではないかと予想される。したがって、仮説②：世話をより必要とし、より愛情を持ってかかわることのできるペットを飼育する子どもの方が、共感性や向社会的行動得点が高い。

家庭でペットを飼育する場合、子ども自身がペットとかかわるだけでなく、子どもは家族がペットとかかわる様子を見る機会が多い。渡辺・瀧口(1986)の幼稚園児とその母親を対象にした研究では、思いやりの心を持ち、他人の感情を自分のものとして感じることでできる母

親に育てられた子どもは、母親と類似した共感性の高い子どもに育つことが示唆された。また、青柳（2007）によると、子どもは親をはじめとする周囲の大人を意識的にも無意識的にも観察しながら学習しているという。特に、幼児期から小学生期までは、親や教師を力ある（尊敬できる）存在であると思っており、力ある存在は観察学習のモデルになりやすいという。

森下（1990）の幼稚園児とその母親を対象とした研究では、悲しいテレビ番組を見ながらよく涙を流すというような「感受性」ではなく、ふだん人を助けるという態度が、実際の援助行動に結びつくということと、援助モデルの観察が大きな効果をもたらすという結果を得た。このように子どもはモデルの行動やその背景にある気持ちや態度をモデリングする。藤崎（2004）の幼稚園児を対象とした研究では、加齢や飼育経験に伴って生物学的知識が増加し高擬人化が制限されるという結果にも関わらず、ウサギ小屋への入室日数が多い子どもの方が高擬人化得点は高いという結果であった。この研究において、動物に対する言葉かけを最も頻繁に行っていたのは、子どもと共同で飼育活動を行う保育者であり、上記の結果は保育者のウサギに対する擬人的なかかわりを学習した結果であると藤崎は推測している。このような結果が示唆するように、家庭においては母親や父親がモデリングの対象として重要な働きをしているだろう。したがって、ペットに対する家族の態度（世話や愛情）を観察することが、子ども自らのペットへの態度に影響し、それが共感性や向社会的行動に影響を与えるのではないかと考える。仮説③：家族のペットに対する世話やペットに対する愛情が豊かなほど、子どものペットに対する世話やペットに対する愛情が豊かとなり、子どもの共感性や向社会的行動得点が高くなる。

方法

1. 調査対象

京都市の私立小学校5、6年生156名と大阪府の公立小学校5、6年生77名から回答を得た。それぞれ授業中に質問紙を配布し、無記名で回

答してもらった。そのうち、225名（5年生男子39名・女子69名、6年生男子52名・女子65名）のデータを分析の対象とした。

2. 調査時期 平成24年7月中旬

3. 調査内容

(1) フェイスシート：学年、性別、家庭でのペット飼育経験の有無（今飼っている・今は飼っていないが昔飼ったことがある・飼ったことがない）、最もよく世話をしたペットの種類、家族の中でペットの世話を一番よくしている人について回答してもらった。

(2) 飼育態度 ①世話の程度：あらかじめ、発達心理学専攻の4年生10名を対象に予備調査を行った。調査内容は、ペットを飼育した経験のある場合はどのような世話をしていたか、世話をするときの態度など自由記述を求めた。それと共に、良（2009）の研究を参考にして7項目を作成した。小学生本人および家族の中でペットの世話に最も関わっていた人について回答してもらった。「毎日している」「週に4、5日している」「週に1、2日している」「月に1、2日している」「していない」の5件法で評定を求めた（表1）。

②愛情の程度：上記と同じように予備調査および良（2009）の研究を参考にして、愛情を持って世話しているかどうか、それぞれ7項目作成し、小学生本人および家族の中でペットの世話に最も関わっていた人について回答してもらった。「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややちがう」「ちがう」の5件法で評定を求めた（表2）。

(3) 共感：桜井（1986）によって作成された児童用共感測定尺度（ESC）より項目を選んで作成した。「はい」「どちらかといえばはい」「どちらともいえない」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」の5件法で評定を求めた（表3）。

(4) 向社会的行動：吉村（2003）によって作成された向社会的行動尺度より項目を選んで作成した。「よくしたことがある」「ときどきしたことがある」「たまにしたことがある」「ほとんど

どしたことがない」の4件法で評定を求めた。15項目のうち給食に関するものが2項目あったが、給食がない学校もあったので、項目を変更して調査を行った(表4)。

結果

1. 尺度の因子分析

まず、各尺度の項目について主成分分析を行い、スクリープロットと固有値の分散を参考にして因子数を決定した。その後、原則として最尤法による因子分析を行い、プロマックス回転を行った。そして各因子に高く負荷する項目の素点の和を尺度得点とし、尺度の信頼性を確かめるために α 係数を算出し、

(1) 飼育態度 ①ペットの世話：ペットの世話に関して子どもと家族についてそれぞれ因子分析をした結果、同じ内容の2因子が得られた。第1因子は「遊び相手をする」「からだの手入れをする」などの項目に負荷が高く、ペットに直接関わるなどの「直接的世話」の因子と命名した。第2因子は「えさや水をあげる」「小屋や水そうのそうじをする」などの項目に負荷が高く、ペットそのものではなくペットに必要な物を通して関わっているので「間接的世話」の因子と命名した。それぞれの因子に高く負荷した項目と α 係数を表1に示す。 α 係数は高い値であった。両因子間の相関は、.578であった。

②愛情の程度：同じようにペットに対する態度について因子分析の結果、子どもと家族についてそれぞれ同じような2因子が得られた。第1因子をペットに対する「愛情」の因子(表2)と命名した。第2因子に高く負荷する項目は一つであったので、以後の分析では使用しなかった。「愛情」因子の α 係数は高い値であった。

(2) 共感：因子分析の結果、2つの因子が得られた(表3)。各因子に高く負荷する項目内容をみると、第1因子は、「けがをして苦しんでいる子を見るととてもかわいそうになります」「元気がない子を見ると、心配になります」などの項目に負荷が高く「共感性」の因子と命名した。第2因子は「悲しいドラマ(げき)を見ていると、つい泣いてしまうことがあります」

「悲しい物語や映画を見ていて、泣くようなことはありません(逆転項目*)」などの項目に負荷が高く、「感受性」の因子と命名した。両因子の相関係数は.309であった。「感受性」の α 係数はあまり高い値とはいえなかった。

(3) 向社会的行動：主成分分析を行った結果、1つの主成分が抽出された。仲間を援助する項目からなる因子で、「向社会的行動」因子と命名した(表4)。その α 係数は高かった。

すべての尺度得点について、平均値とSDを算出し、度数分布を調べたところ、多くの尺度は正規分布に近い分布を示していた。

表1 ペットの世話因子の項目と α 係数

直接的世話	α	子ども	家族
1 遊び相手をする		.860	.853
2 散歩をする			
3 けがや病気のときにかんびようする			
4 からだの手入れをする			
間接的世話	α	子ども	家族
1 小屋や水そうのそうじをする		.836	.666
2 はいせつ物のしよりをする			
3 えさや水をあげる			

表2 ペットへの愛情因子の項目と α 係数
(α 係数：子ども.840、家族.847)

1 愛じょうを持って関わる	
2 ペットの気持ちを考えようとする	
3 家族の一員としてかわいがる	
4 やさしく言葉をかけながら世話をする	
5 めんどうだと思いながら世話をする*	

*逆転項目

表3 共感に関する因子の項目と α 係数

共感性	α
1 けがをして苦しんでいる子を見ると、とてもかわいそうになります。	.810
2 だれとも遊べないで、ひとりぼっちでいる子を見ると、かわいそうになります。	
3 元気がない子を見ると、心配になります。	
4 動物がきずついて苦しそうにしているのを見ると、かわいそうになります。	

- 5 家族のいない老人を見ると、かわいそうになります。
 - 6 泣いている子を見ると、自分までなんだか悲しい気持ちになります。
 - 7 友だちがニコニコ笑っていると、自分までなんとなく楽しくなります。
 - 8 友だちがいじめられているのを見ると、はらがたちます。
 - 9 小さい子はよく泣くが、かわいいと思います。
- 感受性 α .667
- 1 悲しいドラマ(げき)をみていると、つい泣いてしまうことがあります。
 - 2 悲しい物語や映画を見ていて、泣くようなことはありません。(*)
 - 3 うれしいのに泣く子は、おかしいと思います。(*)

*逆転項目

表4 向社会的行動の項目 (α 係数: .892)

- 1 遊ぶとき、仲間はずれになっている子もさそう
- 2 雨の日、かさをわすれて帰れずにいる子を自分のかさに入れる
- 3 重いものを運んでいる子を手伝う
- 4 休み時間中にけがをするなど、ぐあいが悪くなった子を保健室へつれていく
- 5 きけんなところで遊ぶなど、あぶないことをしている子に注意する
- 6 チームをつくって試合をするとき、運動ののがてな子も入れる
- 7 何か失敗をしてしまい、せめられている子をかばう
- 8 悪口などを言われていじめられている子をかばう
- 9 さがし物をしている子を手伝う
- 10 花びんをたおすなど、失敗をしてしまった子のあとかたづけを手伝う
- 11 けがをしている子の持ち物をかわりに持つ
- 12 図工や問題のやり方がわからない子に教える
- 13 先生にしかられた子を「これから気をつければいいよ。」などとなくさめる

2. 仮説の検証

(1) 家庭でのペット飼育経験の影響

家庭でのペット飼育経験の有無が共感性や向社会的行動にどのような影響を与えるかについ

て検討した。家庭でのペット飼育経験について、現在飼育中の群を「現在飼育群」、過去に飼育していたことがある群を「過去飼育群」、飼育経験のない群を「飼育経験無群」の3群に分けた。その内訳の人数を表5に示す。次に「共感性」得点、「感受性」得点、「向社会的行動」得点について、それぞれ飼育経験要因と男女要因を独立変数とする 3×2 の2要因の分散分析を行った。

表5 男女別の飼育経験人数

	男	女	計
現在飼育	44	78	122
過去飼育	21	35	56
飼育経験無	23	17	40
計	85	130	218

その結果、「共感性」得点について、男女の要因に有意差がみられ ($F(1,212)=10.668, p<.01$)、交互作用もみられた ($F(2,212)=3.968, p<.05$) (図1)。交互作用についてその後の検定を行ったところ、男子では現在飼育群の方が飼育経験無群よりも「共感性」得点が高かった ($p<.05$)。女子については群間に有意差はみられなかった。また、過去飼育群と飼育経験無群においては、「共感性」得点は女子の方が男子より高かった ($p<.05$)。「感受性」得点についても、男女の要因に有意差がみられ ($F(1,214)=12.624, p<.001$)、交互作用も有意な傾向があった ($F(2,214)=2.748, p<.10$)。交互作用についてその後の検定を行ったところ、男女共に群間には差はなかったが、現在飼育群と飼育経験無群では性差があり、女子の方が男子より「感受性」得点が高かった ($p<.01$)。

「向社会的行動」得点(図2)については、男女の要因 ($F(1,209)=3.500, p<.10$) と飼育経験の要因 ($F(2,209)=2.451, p<.10$) のどちらにおいても有意な傾向があり、交互作用も有意な傾向を示した ($F(2,209)=3.024, p<.10$)。交互作用についてその後の検定を行ったところ、男子では現在飼育群の方が飼育経験無群よりも得点は高かった ($p<.01$)。女子で

は群間に有意差はみられなかった。また、飼育経験無群において女子の方が男子より「向社会的行動」得点が高かった ($p < .05$)。

以上、男子の場合にのみ、現在飼育群は飼育経験無群よりも「共感性」や「向社会的行動」得点が高いことが示され、仮説1は部分的に支持された。また、飼育経験のない群では、女子の方が男子よりも「共感性」「感受性」「向社会的行動」得点がすべて高かった。しかし、現在飼育している群では「共感性」と「向社会的行動」に関して性差はなかった。

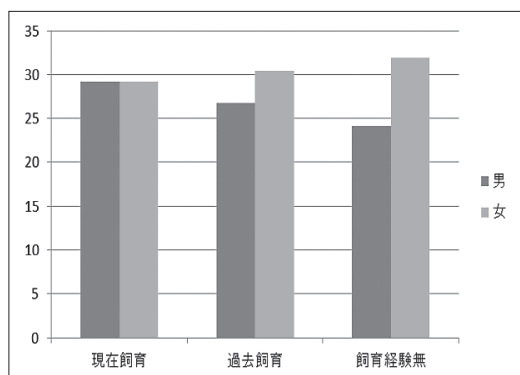


図1 飼育経験と共感性

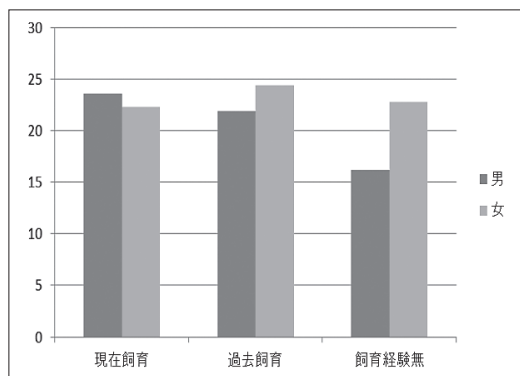


図2 飼育経験と向社会的行動

(2) ペットの種類と飼育の影響

ペットの種類によって世話の頻度や愛情、共感性や向社会的行動にどのような差異がみられるのか検討した。まずペットの種類と世話する家族の人の内訳を調べた(表6)。その結果、ペットとしては犬と金魚が多く、太田・西本・

井上(2005)の調査結果とほぼ類似していた。主として世話する家族は、犬は母親が多く、金魚は母親と父親がほぼ同数であった。そこで、数の多かった犬と金魚について比較することにした。すべてのデータがそろった人数の内訳は、犬55(男23, 女32)、金魚51(男11, 女40)であった。男女の比率をみると、いずれのペットについても女兒の比率が高かったが、特に金魚における女兒の比率が高かった。

世話や共感性等の平均値と標準偏差(SD)を表7に示す。「直接的世話」の内容は、金魚に関して適合しないので分析から外した。ペットの種類と男女の2要因からなる分散分析の結果、「間接的世話」得点は、犬飼育群の方が金魚飼育群より高く ($F(1,104)=11.404, p < .01$)、かつ女子の方が男子より高い傾向がみられた ($F(1,104)=3.020, p < .10$)。飼育における「愛情」得点は、犬飼育群の方が金魚飼育群より高く ($F(1,104)=65.552, p < .001$)、女子の方が男子より高かった ($F(1,104)=7.589, p < .01$)。いずれも交互作用はなかった。つまり、犬の飼育経験の方が金魚の飼育経験者より「間接的世話」得点も「愛情」得点も高いことがわかった。また、「間接的世話」得点や「愛情」得点は女子の方が男子よりも高かった。

「共感性」得点は、犬の飼育経験群の方が金魚飼育経験群よりも高かった ($F(1,102)=6.999, p < .01$)。「感受性」得点は、ペットの種類の違いには有意差はなく、女子の方が男子より得点が高かった ($F(1,104)=8.261, p < .01$)。「向社会的行動」得点については、すべての要因に有意差はみられなかった。つまり、犬の飼育経験のある群は金魚の飼育経験のある群より「共感性」得点が高かった。

(3) ペットに対する家族の飼育態度の影響

家族と子どものペットのかかわりの態度が、子どもの共感性や向社会的行動にどのような影響を与えるかについて、総合的に明らかにするためにパス解析を行った。ペットの種類によって異なった結果が予想されるので、ペットごとに分析を行った。そこで、ペットとして多かった犬と金魚を取り上げた。本来は男女別に分析

表6 ペットの種類と世話する人

	犬	猫	ハムスター	金魚	その他	計
1. 祖父母	6	0	1	7	3	17
2. 父	9	0	2	17	7	35
3. 母	32	10	5	15	24	86
4. きょうだい	4	0	4	6	10	24
5. その他	6	3	3	6	5	23
計	58	13	15	51	49	185

表7 犬と金魚に関する平均値 (SD)

	間接的	愛情	共感性	感受性	向社会的	
犬	男	7.5 (3.86)	13.5 (3.50)	31.0 (6.42)	6.8 (3.31)	26.2 (8.55)
	女	9.0 (3.34)	15.8 (1.29)	31.4 (7.22)	8.8 (3.44)	23.8 (9.90)
金魚	男	5.2 (3.31)	6.7 (3.98)	25.2 (7.15)	5.5 (3.17)	23.3 (6.73)
	女	6.2 (3.38)	9.0 (5.22)	28.8 (7.95)	7.8 (3.72)	23.8 (9.12)

する必要があるが、分析対象者の人数が少ないことから、男女を合わせて分析することとした。

パス解析の結果、ペットが犬の場合、最終的に図3のような比較的適合性の高いパスモデルが得られた。子どもの2つの世話と愛情、共感性と感受性の背景にそれぞれ共通の要因が介在していると考えて、それぞれの誤差間に双方向のパス（相関）を入れている。パス係数はすべて5%水準以下の有意なものであった。犬に対する家族の世話や愛情は、それぞれに対応する子どもの世話や愛情に影響を与えていた。さらに「家族の間接的世話」は子どもの「間接的世話」だけでなく、犬に対する子どもの「愛情」をも高めていた。また、「家族の間接的世話」は子どもの「間接的世話」を高め、その「間接的世話」は子どもの「共感性」を高め、その「共感性」は子どもの「向社会的行動」を高めていた。他方、子どもの「直接的世話」は子どもの「感受性」を高めていたが、その「感受性」は

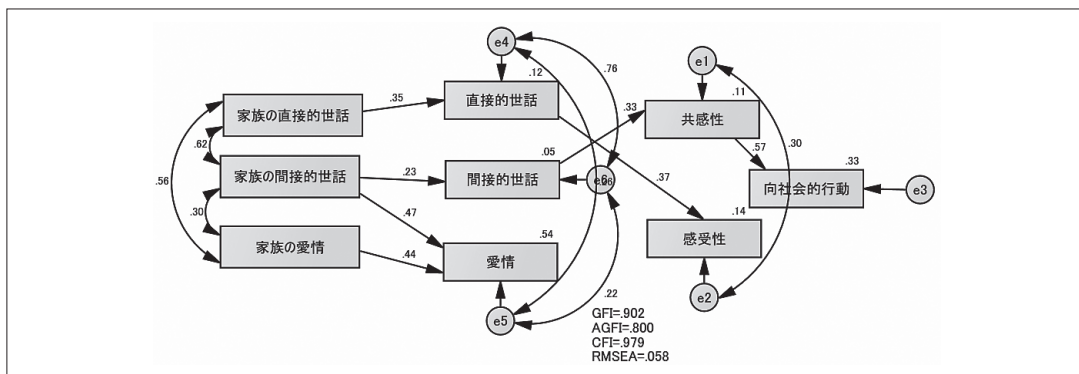


図3 犬のパスモデル

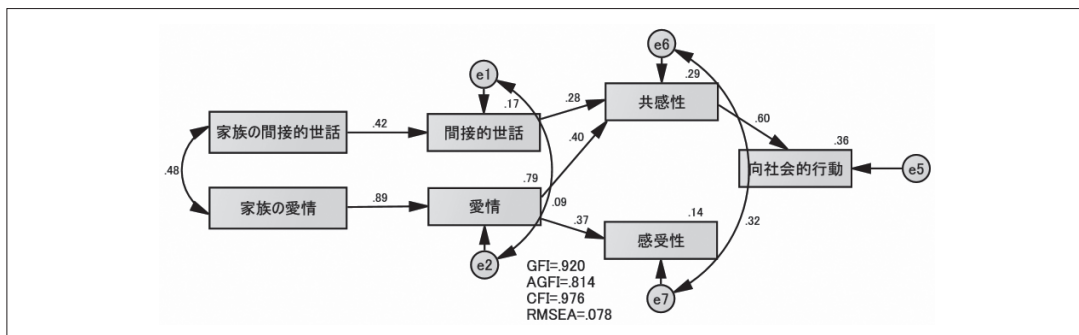


図4 金魚のパスモデル

子どもの「向社会的行動」には影響を与えていなかった。つまり、家族の「世話」や「愛情」は、子どもの「共感性」や「感受性」、「向社会的行動」に対して直接的な効果はもたらさなかった。子どもの「共感性」の説明率は11%、「向社会的行動」の説明率は33%であった。

ペットが金魚の場合、最終的に図4のような結果を得た。金魚に対する「直接的世話」は、項目内容から金魚に対しては適合しないので、変数から外した。得られたパスモデルは、ある程度の適合性を示していた。パス係数は、すべて5%水準で有意なものである。犬の場合と同じように、子どもの変数については、それぞれの誤差間に双方向のパス（相関）を入れている。「家族の間接的世話」は子どもの「間接的世話」を、「家族の愛情」は子どもの「愛情」をそれぞれ高めていた。子どもの「間接的世話」は、子どもの「共感性」を高め、その共感性が「向社会的行動」を高めていた。子どものペットに対する「愛情」は子どもの「共感性」を高め、それを介して「向社会的行動」を高めていた。また、子どもの金魚に対する「愛情」は子どもの「共感性」と共に「感受性」をも高めていたが、「感受性」は「向社会的行動」に影響を与えていなかった。子どもの「共感性」の説明率は29%、「向社会的行動」の説明率は36%であった。

以上、犬と金魚に共通する結果は、家族のペットに対する態度が子どものペットに対する態度に影響を与えていること、家族の「間接的世話」は子どもの「間接的世話」を介して「共感性」を高め、その「共感性」は「向社会的行動」を高めるということであった。しかし、「感受性」は「向社会的行動」に影響を与えないということがわかった。相違点として、ペットに対する「愛情」は、金魚の場合は「共感性」や「感受性」を高めていたが、犬の場合にはそれがみられなかった。

考 察

1. 家庭でのペット飼育経験の影響

ペット飼育経験の影響について、男子につい

て、現在飼育している子どもは飼育経験の無い子どもよりも「共感性」や「向社会的行動」得点が高いことが示された。しかし女子にはこのような有意差はなかった。したがって、仮説1は一部支持された。塗師（2002）の研究においても、男子ではペットの飼育経験のある群の方が飼育経験無群より「共感性」が高かったが、女子ではそのような関連はみられなかった。本研究においても、同じような結果であった。しかし、「感受性」については飼育経験との関係はみられなかった。「感受性」は「共感性」とは異なった側面だということを示唆している。また、男子ではペットの飼育経験の有無は「共感性」だけでなく、「向社会的行動」にもプラスの影響があった。したがって、共感性が高ければ、他者の視点に立った向社会的行動ができると考えられる。戸田（2003）の研究結果、他者の感情認知得点が高い者ほど向社会的行動得点も高いという結果とも一致している。

性差について、飼育経験のない群においてのみ、女子の方が男子よりも「共感性」「感受性」「向社会的行動」得点がすべて高かった。すでに、幼稚園の年中児では女子の方が男子よりも思いやり得点が高いという結果が得られている（森下，2001）。また、小学5年生では愛他行動者は女子の方が男子よりも多いという結果であった（広田，1995）。このような結果は、女性は思いやりがあって人に心配をかけない「愛情的」な特性をもつという性役割認知（東・田中・土屋，1973）と関連しているかもしれない。しかし、小学生高学年を対象とした最近の研究では、女兒の方が男児より攻撃性が高く、思いやり得点が低いという結果が示されており（橋本，2010）、今後検討を要する問題である。

「共感性」と「向社会的行動」得点の性差は、ペット飼育経験群ではみられなくなっているのは興味深い。ペット飼育経験を通じて男子の「共感性」「向社会的行動」得点が高くなったことが関与しているのだろう。女子にそのような効果がみられなかった点については今後の検討が必要である。

2. ペットの種類と共感性・向社会的行動

犬と金魚を比較したところ、犬の飼育経験者の方が金魚の飼育経験者より「間接的世話」の程度が高く、かつ「愛情」得点も高いことがわかった。さらに、犬の飼育経験のある群は金魚の飼育経験のある群より「共感性」得点が高いという結果であった。「感受性」や「向社会的行動」得点については群間に有意差はみられなかった。したがって、仮説②は一部支持された。

佐久川・保住（1999）によると、多くのペットでは注いだ愛情に対して反応が得られるという。特に犬の場合には、飼い主の愛情に対して全身で喜びを表して反応し、その反応の純粋さが飼い主の心を動かし、飼い主の喜びの感情を呼び起こすという。本研究においても、「えさや水をあげる」「小屋や水そうのそうじをする」といった「間接的世話」得点や「愛情」得点では犬飼育群の方が高いことが明らかとなった。小川（1992）は金魚を飼うコツとして「えさをやり過ぎない」「よい水で飼う」「いじらない」の3点を挙げているが、このことから金魚の方があまり世話を必要としない動物であるといえよう。また、犬の方が金魚よりも飼い主のかかりに対する反応が多いということが影響していると考えられる。そのようなことが、犬飼育経験群が金魚飼育経験群より「共感性」が高いという結果につながっていると推測される。

3. 家族のペット飼育態度の子どもへの影響

パス解析の結果、次のことが明らかとなった。①犬と金魚に共通する結果は、家族のペットに対する態度（「間接的世話」や「ペットに対する愛情」）が、子どものペットに対する態度に影響を与えていること、②家族の「間接的世話」は子どもの「間接的世話」を介して「共感性」を高めること、③その「共感性」は「向社会的行動」を高めるということが明らかとなった。しかし、「感受性」は「向社会的行動」に影響を与えないということがわかった。

家族のペットに対する態度が子どものペットに対する態度に影響を与えていたという結果は、子どもが家族の態度をモデルとしていたことを

示すものだろう。ペットのことを家族の一員としてかわいがりペットに優しく言葉をかけながらかわるなど、ペットに対する家族の愛情の深さを子どもは観察している。このような家族の愛情あふれる姿は、子どものペットに対する思いやりや愛情に影響しているようだ。従来の研究でも、モデル行動の観察が子どもの援助行動を促進したことが示されている（森下，1990）。また、子どもは親が子どもに向けた態度・行動だけでなく、他の人に対する態度・行動をも観察している。子どもに対して暖かくて優しい親が一般に子どものモデルとなりやすい（森下，1996；青柳，2007）ことも、これらの結果に反映しているだろう。

本研究において、犬や金魚への「間接的世話」は「共感性」を高めていた。この結果は塗師（2000）の結果と一致するものであった。さらに、その「共感性」は「向社会的行動」を高めるということが明らかとなった。日常的にペットへのかかわりを通して共感性が養われ、それが向社会的行動を高めたのではないと思われる。したがって、犬と金魚に関する共通点から、単に家庭でペットを飼育しているというだけではなく、家族のペットへの世話のようすを観察し、家族をモデルとして子ども自身が愛情をもってペットの世話をするということが、共感性や向社会的行動の発達に影響を与えると考える。

犬と金魚の相違点として、ペットに対する「愛情」は、金魚の場合は「共感性」や「感受性」を高めているが、犬の場合にはそれがみられなかったことである。ペットへの「愛情」に関して、犬への「愛情」得点は金魚に比較して著しく高かった。これは佐久川・保住（1999）が指摘するように、世話する人と犬との豊かな相互作用を反映しているのだろう。そのようなことが天井効果として作用し、共感性の高さに差異をもたらさなかったのではないかと考えられる。それに対して金魚に対する「愛情」豊かなかかりには個人差が大きく、それが「共感性」の高さの個人差につながったのではないかと推測される。塗師（2000）の研究にも示唆されているように、一般的には、ペットに対する「愛情」

は共感性や向社会的行動を高めると考えられる。

子どもの「感受性」は「向社会的行動」に結びつかなかったという結果は、幼児を対象とした結果（森下，1990）とも共通している。ここで測定されたような「感受性」は，本人の情動を高めても他者を援助するような行動にはつながらないのではないのか。

今後の課題として，ペットに対する世話の尺度や測定方法の改良があげられる。また，家族と子どもの関係という変数を入れた分析も必要となるだろう。さらに，動物の飼育だけでなく植物の栽培が子どもの思いやりにどのように結びつくか，そのプロセスが明らかにする課題が残されている。

引用文献

- 青柳 肇 (2007). 思いやりを育む親子関係 (特集2 今こそ思いやりを育む) 教育と医学, 55, 76-83.
- 藤崎亜由子 (2004). 幼児におけるウサギの飼育経験とその心的機能の理解. 発達心理学研究, 15, 40-51.
- 橋本香奈 (2010). 親の養育態度が児童の攻撃行動に及ぼす影響. 京都女子大学大学院発達教育学研究科修士論文 (未公刊)
- 東 俊子・田中久子・土屋和子 (1973). 性役割認知の発達. 教育心理学研究, 21, 48-53.
- 広田信一 (1995). 教室における自発的愛他行動の観察的研究. 教育心理学研究, 43, 213-219.
- 今野洋子・尾形良子 (2010). 「札幌市における動物介在教育 (AAE) の実態と課題—モデル動物介在教育 (AAE) の探求—」. 人間福祉研究, 13, 29-42.
- 角田 豊 (1991). 共感経験尺度の作成. 京都大学教育学部紀要, 37, 248-258.
- 良 まどか (2009). 家庭内の動物飼育経験が子どもの共感性に及ぼす影響に関する研究. 京都女子大学発達教育学部2008年度卒業論文.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル—. 川島書店.
- 棚沢令子・福本 俊・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響. 教育心理学研究, 57, 168-179.
- 文部科学省 (2008). 「小学校学習指導要領」
- 文部科学省 (2008). 「幼稚園教育要領」
- 森下正康 (1990). 幼児の共感性が援助行動のモデリングに及ぼす影響. 教育心理学研究, 38, 174-181.

- 森下正康 (1996). 子どもの社会的行動の形成に関する研究. 風間書房.
- 森下正康 (2001). 幼児期の自己制御機能の発達 (3)—父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか—. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 11, 87-100.
- 森下正康 (2010). 児童の心理—パーソナリティ発達と不適応行動—. サイエンス社.
- 塗師 斌 (1999). 大学生の動物に対する接触可能度と飼育経験—教員養成系大学生について—. 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 238.
- 塗師 斌 (2000). 動物飼育経験と動物に対する好意度が共感性に及ぼす影響. 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 1 教育科学, 3, 1-10.
- 塗師 斌 (2002). ペット飼育経験が共感性の発達に及ぼす影響—ペットの種類に見た場合—. 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 1 教育科学, 4, 27-34.
- 小川 勉 (1992). 教室で飼える小動物. 明治図書出版株式会社.
- 大西奈央・米澤好史 (2009). 人間とペット動物の関係性—動物観の構造とその形成過程を探る—. 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 59, 17-26.
- 太田莉加・西本実苗・井上 健 (2005). ペット飼育と飼い主の外向性—神経症的傾向, 心身症状について. 臨床教育心理学研究, 31, 83-96.
- 佐久川 肇・保住芳美 (1999). 老人とペットの関わりについて. 川崎医療福祉学会誌, 9, 145-148.
- 桜井茂男 (1986). 児童における共感と向社会的行動の関係. 教育心理学研究, 34, 342-346.
- 佐藤淑子 (2012). 父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動. 鎌倉女子大学紀要, 19, 25-35.
- 首藤敏元 (1985). 児童の共感と愛他行動—情緒的共感の測定に関する探索的研究—. 教育心理学研究, 33, 226-231.
- 戸田須恵子 (2003). 幼児の他者感情理解と向社会的行動との関係について. 北海道教育大学釧路校研究紀要, 35, 95-105.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ (1986). 幼児の共感と母親の共感との関係. 教育心理学研究, 34, 324-331.
- 吉村 庸・沢本美紀・繁野由香・曾我京子・滝川明美 (1983). 高知市及びその周辺地域における幼稚園ならびに保育園での生物の飼育・栽培の状況. 高知学園短期大学紀要, 14, 109-116.
- 吉村真理子 (2003). 児童の「向社会的行動」測定の試み. 千葉敬愛短期大学紀要, 25, 119-134.